

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

特集：マダム・ブラヴァツキーのチベット：序論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 良男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00005962

特集

マダム・ブラヴァツキーのチベット

杉本良男*

Madam Blavatsky's *Tibet*

Yoshio Sugimoto

「そこで僕は二年の間は西藏(チベット)に旅行し、拉薩(ラッサ)に遊んで、
刺麻教(らまきょう)の宗長とたのしい数日も暮した。——三上於菟吉訳
「シャーロック・ホームズ〈空家の冒険〉」(1903)青空文庫版¹⁾。

序論

2013年9月にアムステルダムで、「魔術化された近代——近代世界における神智と芸術」(Enchanted Modernities: Theosophy and the arts in the modern world)と題する国際シンポジウムが開かれた。主催者側によれば、この神智 Theosophy と芸術 arts という、かなりマニアックな主題のシンポジウムに、130人ほどの参加者があり、2,000人ほどが報告のオンライン中継を見たようである。神智主義、神智協会がいまだに知的関心の的であることに非常に驚かされた。

シンポジウムは、イギリスのヨーク大学が主催する「魔術化された近代——神智、近代主義、芸術、1875–1960年」(Enchanted Modernities: Theosophy, Modernism and the Arts, c. 1875–1960)の一環として行われた。「魔術化された近代」プロジェクトにしても、また「神智と芸術」シンポジウムにしても、基本的に芸術それも絵画、音楽、演劇が主題であり、多くの報告者の関心は、まさに神智協会や神智論者が推進してきた、芸術作品における目に見えない「隠された意味」をさがしだそうという、それ自

* 国立民族学博物館民族文化研究部

体非常に神秘主義、隠秘主義の色に染まっていた。参加者が主にヨーロッパの研究者であったとはいえ、神智協会がこのようなオリエンタリスト的関心ふんぷんのなかで生きながらえていることに、東洋からの参加者としていささか複雑な思いをいたしたのは事実である。

日本の神智主義研究をリードしてきた吉永進一氏（舞鶴高専）によれば、2013年という年は研究史の中でも、特筆すべき意義があったという。というのは、アムステルダムだけでなく、その後もイスラエル、アメリカ、イギリスなどで神智主義研究を直接うたう国際会議が開かれて、かついずれも盛況だったようである。このことは、協会創設からほぼ140年、マダム・ブラヴァツキー没後120年を超えたこの時期に、神智主義研究がようやく学問的研究の対象として市民権を得たことを意味している。こうした変化の兆しは、1980年代から始まり、ここに至ってその組織化がいっそう進んだというべきである。

神智主義（神智論、神智学、theosophy）研究は、1980年代半ばに大きな転期を迎えた。マダム没後100年にあたる1991年前後にマダム研究が再燃するとともに、そこで大きなパラダイム・シフトも起った。そのきっかけの一つは、イギリスの「心霊研究会」（SPR: Society for Psychical Research）が100年前に公表したホジソン報告（1885）についての、自ら心霊研究会員でもあったハリソンによる再検討である（Harrison 1986; Price 1986）。その後、90年代に入ると、リーゲル夫妻やテイラーなどの本格的なチベット研究者、仏教研究者などが参入したことにより、「研究」としての質も専門化し向上した（Reigles 1999; Taylor 1999）。そして、90年代半ばのポール・ジョンソンの研究（Johnson 1994; 1995）は、神智協会側の過剰ともいえる拒絶反応を呼ぶなど、大いに物議をかもし一方、神智主義研究にも根本的な転換を促した。

ポール・ジョンソンの書が示唆した、「反英」という一点における、神智協会とインド・エリート・ナショナリストとの間に結ばれた深い関係は、まずベヴァーなどによる政治学的考察を促した（Bevir 1994; 2000; 2003）。これによって、それまでほとんどが、あくまでも「宗教」的な観点からの神智主義研究が主流であり、論争が「神がみの闘争」の様相を呈していたのに代わって、比較的冷静な学問的論争が行われるようになった（Godwin 1994; Prothero 1996; Price 2003）。ベヴァーなどは、マダムやオールコットが政治との関わりを厳しく戒めていたのにもかかわらず、現実にはむしろ政治的な影響力を後世に残した逆説を説いて興味深い。

文学文化批評の分野で、カルチュラル・スタディーズの立場を超えて活躍するガウリ・ウィスワナーダン（Gauri Viswanathan）は、こうした潮流をうけて、ウェーバー

以降のいわゆる「世俗化論」を批判しつつ、高度情報化時代における「隠秘主義」(オカルティズム)の積極的な位置づけを行い、その延長上で神智協会とくにマダムやベサントについても検討しており、マダム・ブラヴァツキーについての著書も用意しているときいた(Viswanathan 1998; 2000; 2006; 2008; 2010; 2011)。

また、ラックマンの最近の書は、マダムの生涯の「歴史的事実」であるかどうかを争うのではなく、その「評価」(reputation)の歴史を明らかにすることだ、というスタンスをとり、さまざまな見解を天秤にかけて再考している。こうしたラックマンの態度は、マダムの後世への影響という点に論点を絞り、かつ比較的中立的な立場を堅持している点で、プロテーロやウイスワナーダンとともに大いに参考になる(Lachman 2012: viii–vii; Prothero 1996; Barzun 2002)³⁾。

このように、従来欧米やインドなどの限られた範囲における、宗教的な意味での神智協会やマダム・ブラヴァツキーの評価が行われてきたのに対して、90年代以降は、19世紀末の世界情勢を背景にしたより広く複雑な文脈を踏まえた議論が必要となっている。本特集が意図するのは、とくにマダム・ブラヴァツキーの「チベット」をめぐるさまざまな事象を、ロシア、インド、大英帝国、中国などにまたがる政治経済状況を踏まえた学際的な議論を行うことであり、それは神智主義研究に一石を投ずる功があると考えている。

1 ニューエイジのゴッドマザー

1875年にオールコット「大佐」(‘Colonel’ Olcott, 1832–1907)とともに神智(学)協会(Theosophical Society)を立ち上げたマダム・ブラヴァツキー(Madame Blavatsky, 1831–1891)は、波瀾の生涯を送ったが、あいかわらず現代スピリチュアリズムの祖として高い評価をうけている。とりわけ近代ニューエイジ運動の直接の祖としての地位は揺るがず、ニューエイジの母、あるいはニューエイジのゴッドマザーなどとも称されている。パートリッジなども述べているように、西欧世界においては、近代化が進むとともに、むしろ既成の宗教、教派以外の多種多様な信仰が浮きつ沈みつつしているのが現状であり、それはいわゆる合理化論、世俗化論とは全く正反対の方向に動いている(Partridge 2004a; 山中 2004; Viswanathan 2008; Hanegraaff 1998; 2013; Hammer 2001)。

コロームなども述べているように、マダム・ブラヴァツキーの名声の根拠には、マダムが一貫してチベットの仏教や広い意味での神秘主義を重視し続けたことが大きく

働いている (Korom 2001: 167-171; Lopez 1998)。毀誉褒貶の激しいマダム・ブラヴァツキーと神智協会ではあるが、こと西欧世界に仏教を普及させた功は、ともかく大いに評価されるべきであり、また、アメリカにおけるチベット・イメージは、秘教的、神秘的な力の源として若い世代にも広くかつ強力に定着している (Korom 2001: 167-171; Lopez 1998; McMahan 2008: 4-6, 97-99)。

マダムを祖と崇めるニューエイジ運動は、周知のように1970年代後半から80年代にかけてアメリカ西海岸を中心に始まったムーヴメントで、それに先立つ1960年代アメリカのカウンターカルチュアを継承したものである。いずれも基本的には現実批判の改革運動で、とりわけ物質主義万能の現代にあっては、西欧に対する東洋、科学に対する精神、理性よりも感性、論理よりも直感を重んずる共通性がある。そのため、近代科学主義批判のスタンスから、精神主義、神秘主義 (隠秘主義、心靈主義) に傾く傾向がある (Partridge (ed.) 2004: 208-212; Hanegraaff 2009: 339-356; Webb 1971)。

ニューエイジの源をさらにたどれば、19世紀後半のユートピア的社會主義に遡ることができる。ちなみに神智協会3代会長のアニー・ベサントは、もともとはアイルランド系のユートピア的社會主義者であった。20世紀に入って、グルジェフの弟子となったオレイジ (A. R. Orage, 1873-1934) の『ニューエイジ *New Age*』(1914) を経て、1930年代の「永遠の智慧 *Ageless Wisdom*」運動のアリス・ベイリー (Alice A. Bailey, 1880-1949) に至ると、にわかにチベットがキーワードとして浮上してくる。そして、グルジェフもベイリーもいずれもマダム・ブラヴァツキーの強い影響を直接受けている。

ニューエイジが現代的な形をとるのは1975年デーン・ルディア (Dane Rudhyar, 1895-1985) のそれまでの先駆的な業績について述べた *Oculta Preparation for a New Age* の出版からのことである。そこでは、神智協会という「大師」(mahatma/master) にあたる人物を「権化」(avatar) と称し、また四海同胞 (Universal Brotherhood) にあたる「トランス・ヒマラヤ・オカルト同胞」(Trans Himalaya Occult Brotherhood) とも称している。ジョンソンが言うように、こうした「大師」は、ニューエイジ市場 (New Age Marketplace) でますます数が増加している。マダム・ブラヴァツキーのいうチベットの大師が現在も生きているという意味で、マダムがニューエイジの直接の祖あるいは母、ゴッドマザーなどといわれるのもむべなるかなである (Korom 2001: 167-170; Johnson 1994: 14)。

ドナルド・ロベスは、アメリカのニューエイジ運動と連動したチベット、とりもなおさずチベット仏教をめぐるオリエンタリズムを、「ニューエイジ・オリエンタリズム

ム」とよんだ。それは、西洋に対抗する東洋の救済ではなく、東洋（中国）に対する西洋の援助による東洋（チベット）の救済という側面を持ち、またみずから主体となれないチベット人を、外部者が救済するという図式になっている。さらにそこでは、1959年以前のチベットのみが実在し、それ以降は空虚なチベットとみなされることになる（Lopez 1994: 16-20）。

ロベスは、ここ200年ほどのあいだに欧米におけるチベット・イメージが乱高下し、植民地化に抗したと評価される反面、その宗教が頹落した仏教としてのラマ教にすぎないと見下される結果にもなっていると指摘した。ヨーロッパにおける仏教研究が進むなかでは、純粹仏教、原始仏教を賞賛し、チベット仏教はその規格外ということでおとしめられるようになった。ここでの、原始-頹落、純粹-混淆、真正-派生、聖的-魔的、善-悪、などの対立は、西-東、西洋-東洋などの対立とも連動しており（Lopez 1994）、元を正せば、ヨーロッパにおけるプロテスタント的宗教観の支配と、カトリック的儀礼主義・偶像崇拜への批判が前提となっている（杉本 2001; 2003a, b）。

ロベスはまた、チベットをめぐるオリエンタリズムには、植民地化も近代化もヨーロッパから直接手を下されたものでないという意味で、アジアのほかの地域の仏教の運命とは異なっていると指摘する。じっさいチベットが支配され近代化されるのは西からではなく、東の中国が直接手を下してのことである。チベットをめぐるオリエンタリズムは1959年の中国への併合によって多くの難民がとりわけアメリカに流れたことでふたたび大きな変貌する。ここで、併合以前と以後が対比され、中国によって寺院、僧院が破壊され、ダライ・ラマが亡命するなど破壊された仏教の現実が、過去の理想化された伝統仏教と対比されるようになる。

マダム・ブラヴァツキーのチベットは、ヴィクトリア期の仏教学的、インド学的チベット観に支配されていた時代のチベットにほかならないが、それとともにマダムのチベット仏教への関心はまた本格的なチベット研究者にも直接大きな影響を与えた。とくに、アメリカにおけるチベット研究者として大いに名を成したウォルター・ウェンツ（Walter Wentz, 1878-?）は、十代で父の書架にあったマダムの著書を読み、決定的な影響をうけたという。1901年にはポイント・ロマの神智協会アメリカ・セクションに加入し、キャサリーナ・ティングリーの勧めでスタンフォード大学に学び、ウィリアム・ジェイムズやウィリアム・イエイツらと机を並べた。アイルランド文芸復興運動にも共鳴し、名前をエヴァンス=ウェンツに変えたほどである。その後のおもにアメリカでの業績はあらためて列挙するまでもなく多大なものがある（Lopez 2008: 183-185）。

高本康子が指摘するように、マダム・ブラヴァツキーの「仏教」への関心は、盟友のシネットを通じて西欧世界に紹介されたことで、心靈主義などに関心を持つ人びとに大きな影響を与え、また1888年神智協会に創設された秘教部門（Esoteric Section）へのアイルランド詩人イエイツなどの加入を促した意味もあった（高本2010; Washington 1993: 90–91）。アイルランド文芸復興運動は神智協会と深い関わりがあり、イエイツの他にもジョイス、ラッセルなどが大いに関心を寄せていた（Cranston 1993: 463–483）。さらに両者は「反-大英帝国」という一点で共鳴し、実際の交流も目立っていた（Viswanathan 1998; 2004）。

高本はまた、マダムなどを通じたイギリスでの仏教受容が、日本の西本願寺普通教校の「反省会」などに影響を及ぼしていたことも指摘している。実際、吉永進一は明治期の仏教改革運動の中での、鈴木大拙と神智協会との関係や、上記「反省会」や「新佛教同志会」などを通じた協会の影響、中でも平井金三、野口復堂ら国際派の日本の仏教者に与えた影響などについて詳細に検討している。とくに、オールcottとアナガーリカ・ダルマパーラは日本を訪れて、おもに改革派の仏教者との交流があった。これらを合わせて考えるならば、そこで東西を循環する知の交流の一面が明らかになる（高本2010: 49–59; Yoshinaga 2009: 119–131; Algeo 2007）。

日露戦争期の『反省会雑誌』には、大久保格によるユニテリアンと神智学との関係についての論考があり、古河老川はこれをチベット密教や禪仏教などとも結びつけて考察している（Yoshinaga 2009: 128–129）。ユニテリアニズム（unitarianism）や超絶論（transcendentalism）はいずれも普遍宗教（universal religion）の実現をめざす運動である。これらは、19世紀後半の、科学主義、合理主義の時代にあって、既存の教会を批判しつつキリスト教の再編を目指す「キリスト教リベラリズム」の一環として起こり、インドのネオ・ヒンドゥイズムやガンディーなどに影響を及ぼしただけでなく、1893年のシカゴ万国宗教者会議を主導したのもこの系統をひく人びとであった。こうして、ユニテリアニズム、超絶論などを媒介にして、万国の「宗教」が再定義されるとともに、日本の新佛教から、インドの宗教ナショナリズムやガンディー主義などまでが、深く結びつけられていたことがわかる（杉本2003b; 2015a）。

2 エレーナ・ペトローヴナ・ガン

マダム・ブラヴァツキーこと本名エレーナ・ペトローヴナ・ガン（Elena Petrovna Gan/von Hahn）、結婚後エレーナ・ペトローヴナ・ブラヴァーツカヤ（Elena Petrovna

Blavatskaia) は⁴⁾、ロシア=ユリウス暦 1831 年 7 月 31 日深夜 1 時 42 分 (グレゴリオ暦 8 月 11 日午後 11 時 22 分) ごろ、騎馬砲兵隊長だったドイツ系軍人ペーター・ガン (フォン・ハーン, Peter Alekseevich Gan/von Hahn, 1798–1873) と、ロシア貴族の家系につらなるエレナ・アンドレーエヴナ・ガン (Elena Andreevna Gan, 1814–1842) の両親のもと、エカテリノスラヴ (現ウクライナ, ドニプロペトロウシク) で生まれた。この年はロシアでコレラが流行した年であり、エレナは未熟児として生まれたので呪術的な対応も済ませ、異例ではあるがすぐに洗礼をうけた (Zirkoff 1966: xxv–xxvi; Sinnett 1986: 13–14, 18–20; Sepharial 1893)。

エレナ・ペトローヴナの母方とくに母の母方は、ロシアの中でも華麗な系譜をひく一族である。母エレナ・アンドレーエヴナは夭折したが、ゼネイダ・エルヴァ (Zeneida R-va) の筆名をもつ高名な作家・小説家であった (Zhelihovsky 1894–1895, 高橋論文)。母の母方はキエフ国家を創建したノルマン人 (ヴァイキング) の伝説上の大公リューリク (9 世紀) の系譜を引く由緒あるドルゴルーコフ家であり、エレナ・ペトローヴナの周囲も華麗な人脈がとりまいている。なかでものちにロシア首相にのぼりつめたヴィッテ伯爵 (Sergei Iur'evich Vitte (Witte), 1849–1915) は、母の妹エカテリーナの子つまりエレナ・ペトローヴナ (マダム・ブラヴァツキー) のいとこにあたる。また、もう一人の妹ナジェージダ・アンドレーエヴナ (Nadezhda Andreevna Fadeeva, 1828–1919) はエレナ・ペトローヴナがよく親しんでいた人物である (Zirkoff 1966: xxix; Sinnett 1986: 14–15)。

母の父アンドレイ・ミハイロヴィチ (Andrei Mikhailovich Fadeev, 1789–1867) は、華々しい戦果を上げた軍人の家系の出で当時顧問官をつとめていたが、あくまでも平凡なファージェエフ家の出であった (井上論文)。そのため妻 (母の母) のエレナ・パーヴロヴナ公女 (Elena Pavlovna Dolgorukova, 1789–1860) は一族から結婚を反対されたという。エレナ・アンドレーエヴナはこの母の影響をうけて進取の気風あふれる女性であった。なお、この祖母 (母の母) の母はフランスのユグノー教徒の家系の出である。さらにこの祖母 (母の母) の父、パーヴェル・ドルゴルーコフ公爵 (Pavel Vasil'evich Dolgorukov, 1755–1837) は薔薇十字系のフリーメーソンリーであり、1754 年に創設された厳格遵守団 (Rite of Strict Observance) に属し、一説ではサンジェルマンヤド・カリオストロなどと交流があったとも噂される (Zirkoff 1966: xxvi–xxvii; Sinnett 1886: 16–17)。

エレナ・ペトローヴナが生まれたとき、父はポーランドに赴任していた。その後 1832 年に帰国して、すぐ下の弟アレクサンドル (Aleksander, 愛称サーシャ Sasha) が

生まれたがすぐに病没した。1835年4月には妹ヴェーラが生まれたが、この子は長じて子供向け作家ヴェーラ・ジェリホフスカヤ（Vera Petrovna Zhelikhovskaia, 1835–1896）となった。1840年に弟のレオニード（Leonid Petrovich Gan, 1840–1885）が生まれた（Zirkoff 1966: xxx–xxxii; Sinnett 1886: 18–24）。

一方、マダムの父方のガン家は、十字軍時代のドイツ、メクレンブルクの貴族ロッテンシュテルン・ハーン伯爵家の系譜をひき、エレーナの数代前に新天地を求めてロシアに移住し定着したという。父ペーターは祖父アレクシス將軍のあとをついで軍人となり、最後は大佐までのほりつめた。エレーナの生地エカテリノスラフでコーカサス問題担当官大尉として働いていたときに妻をみそめた。父は厳格な軍人で、オカルトなどは信じていなかったが、娘に対してはいつも支援を惜みず、マダムの若いころからの世界漫遊の原資を提供したともいわれる（Zirkoff 1966: xxvi; Sinnett 1886: 14–18, 高橋論文）。

マダムの父方の系譜については、華麗な母方に比べると分からないことが多いが、ドイツの血が流れ込んでいることが微妙な影を落としているようである。ラウルは、そこに汎スラブ主義者としての叔父ロスティスラフヤイトコのヴィッテの反ドイツ的な意図があると深読みする。また、ジルコフの年譜に記されているロッテンシュテルン・ハーン家というのも、メクレンベルクの出というのも怪しいと断じていて、事態はますます闇の中である（Reitemeyer 2006; Laur 2005）。逆に妹ヴェーラによれば、父は自らの出自について熱心に書き記し、その出自を誇っていたという（Zhelihovsky 1894–1895）。

ガン一家は父の仕事の都合上、マロロシア（小ロシア）やノヴォロシア（新ロシア）と呼ばれた現在のウクライナ各地を転々としたのち、1836年にサンクト・ペテルブルクに落ち着いた。1837年5月から1年ほどのあいだ、一家4人はアストラハンの祖父母アンドレイ・ド・ファジェーエフ、エレーナ・パーヴロヴナ夫妻の家に滞在したが、ここでカルムイクのモンゴル系のチベット仏教（ラマ教）に初めてふれた。この経験がのちのチベットとの関わりに大きな意味をもってくる。1839年にはオデッサに滞在し、さらに父がポーランドに異動を命ぜられたとき、母の健康がすぐれなかったこともあって、当時県知事に任命されてアストラハンからサラトフに移っていた祖父母のもとで暮らした（Zirkoff 1966: xxxi–xxxii; Sinnett 1886: 24–25）。

1842年6月24日（グレゴリオ暦7月6日）エレーナが11歳のときに、肺結核を病んでいた母が早逝し、子供たちは1年後にふたたびサラトフの祖父母のもとにあずけられた。エレーナ・ペトローヴナは、進取の気風にあふれた祖母のエレーナ・パー

ヴロヴナ公女の影響をうけるとともに、曾祖父パーヴェル公の書齋で隠秘主義文献などにも親しみ、とくにパラケルズス、クンラート、アグリッパなどの中世錬金術の本に影響を受けたという（Zirkoff 1966: xxvi, xxxii; Sinnett 1886: 24-51; Johnson 1994: 4）。

1845年サラトフの祖父アンドレイは職を解かれ、いったんサンクト・ペテルブルクに戻ったのち、翌46年友人に乞われてジョージア（グルジア）に移った。この地は歴史的にイランやトルコとの関係が深い「異教のアジア」（Heathen Asia）であった。この間、エレナらはチフリス近郊にあるおじユリーの農場で1年ほど暮らしたのち、祖父アンドレイの住むチフリス（現ジョージアのドビリシ）に落ち着いた（Zirkoff 1966: xxxiii-xxxiv; Sinnett 1886: 51-52）。

1846、7年ごろのエレナは多感な時期で、社交界よりも神秘主義的な文献にのめり込み、神秘主義について深く語り合える友人アレクサンドル・ゴリーツィン公爵を知った。ゴリーツィンは一家の古い友人ウラジーミル・ゴリーツィン公爵の息子であるが、有名なフリーメーソンで神秘家であったともいわれる。ただ、アレクサンドルはしばらくしたのちチフリスをはなれている。マダムが幼少のころから錬金術や隠秘主義関連の文献に親しんでいたことは、のちの1882年に幼なじみのアレクサンドル・ドンドウコフ＝コルサコフ公爵に宛てた手紙にも述べられている。しかし、マダムはすべての知識を秘密の手段で得たということにしていたため、このことを表向きは認めなかった。この手紙（Letters to HPBSP）の内容は長く知られていなかったが、1951年になってようやく公開された（Zirkoff 1966: xxxiv）。

エレナ嬢は18歳の誕生日をひかえた1849年7月7日に、祖父の古い知り合いでアルメニアのエレバン州副知事であったニキフォル（ニコライ）・V・ブラヴァツキー（Nikifor (Nikolai) Vladimirovich Blavatskii, 1809-?）と突然最初の結婚をして、正式にはエレナ・ペトローヴナ・ブラヴァツカヤ（Elena Petrovna Blavatskaia）となった。この結婚については、マダム自身、コーカサス最高司令官ドンドウコフ＝コルサコフへの請願書で、「私は1848年7月6日にエレバン県ジェラログリーで結婚しました。そのとき私は17歳でした」と述べていることなどからも長らく1848年説がとられていた（H.P.B Speaks II: 155-156; Sinnett 1886: 53-56）。

しかしジルコフは、1848年冬に婚約、結婚式は49年7月7日のことだとしている。それによれば、エレナは49年春におそらくゴリーツィンのあとを追って家出をした。その後家族は現アルメニアのエレバンから100キロのゲルゲル Gerger (Djellallogly) に移って、49年7月7日に式が挙行されたという。ジルコフは、妹ヴェーラが、エレナの結婚前の49年夏に家族揃ってゲルゲルに行ったと証言して

いることを重視する。また、いとこのセルゲイ・ヴィツェが生まれたのが、49年6月17日(29日)であるが、これも結婚前だったという。ジルコフ説は1966年に現れたが、そこから潮目がかわったようで、その後はほぼこの1849年説が採用されている(Zirkoff 1966: xxxv-xxxvi)。

ブラヴァツキー夫人となったエレーナは、夫を6, 70代だといっていたようであるが、じっさいは22歳年上の1809年生まれだったようである。いずれにしても夫とは年がかなり離れていた。また祖父母の家からさらに離れたアルメニアで暮らすのには耐えられなかったようで、すぐに家を出る。世間の慣行への反抗心がつよかったマダムは、夫婦は性関係を持たなければならないという既成概念にさえ批判的であったので、処女のままであったと主張している。これはのちに私生児論争の焦点となるが、ともかくマダムが夫を「羽根のないカラス」とよんで嫌っていたことは確かなようである(Sinnett 1886: 56-57)。

エレーナは結婚した年の10月に家を出て、クルド軍人の助けでイラン国境を越えていった。エレーナはクルドの族長サハル・アリ・バクの命を救ってからクルド人とは親しくしており、一緒に馬でアララト山のかなたのトルコ領へも行っていったという。ただ、サハル・アリは夫ニキフォルに依頼されたエレーナの監視役だったという説も有力である。人知れず家を飛び出したマダムは、チフリス(トビリシ)の祖父母のもとに帰った。祖父は父のもとに帰らせようとしたが、エレーナはこれに逆らって祖父のもとをふたたび飛び出し、コンスタンティノーブルに行った(HPB speaks II: 155; Sinnett 1886: 57-59, 143-145; Kingsland 1938: 37-38)。ミードなどはこうした突飛的な行動の背景にはゴリーツィンへのあくなき未練があったとみている(Meade 1980: 51-54)。

マダム・ブラヴァツキーが、祖父のもとを離れてから、アメリカにわたる1873年までのほぼ四半世紀の動向は定かではない。ジョンソンやミードなどはこの放浪時代を、「ヴェールにつつまれた歳月」(veiled years)とうまいことを言っている。マダム自ら語ったところでは、この間世界をめぐり、とくにチベットで数年間オカルトの修行を積んでいたことになっている。確たる証拠があるわけではないが、かなり広く世界をめぐっていたことは確かなようで、その足跡は少なくともヨーロッパ、中東、北米などに及んでいたらしい。さらに、この間心霊主義や隠秘主義にも関わっており、カイロでパウル・メタモンやマックス・テオンらに学び、また有名な霊媒ダニエルD. ヒューム(Daniel D. Home, 1833-86)についていたこともあるという。こうしたあいまいさがかえって、マダム・ブラヴァツキーの生涯の神秘化の度合いを著しく高め

ていったのである (Campbell 1980: 4-5; Johnson 1994)。

一方、マダム・ブラヴァツキーと故郷のロシアとの関係は全般に微妙なところがある。哲学者ウラディミル・ソロヴィヨフ (1853-1900) による私生活の暴露本 (Solovyoff 1895) もあれば、イトコのセルゲイ・ヴィッテ伯爵の回顧録には、マダムの奔放な生活について述べられている (Witte 1921)。周知のように、ヴィッテは日露戦争後の講和交渉のロシア全権代表であり、のちに首相も務めた人物でもあるが、回顧録はかなりのちになって記されたものなので信憑性を疑うむきも多い。もちろん、実の妹ヴェーラはマダムの第一の擁護者であるが、その記述などにはところどころ破綻の兆しが見える。

3 マダム・ブラヴァツキーとチベット仏教

「私は、長年仏教徒とチベット人を知っていたという (編集者の) ライリー氏に、自分がチベット人のラマ教について非常に詳しいことをお知らせして手紙を閉じたいと思う。私は子供のころ、何ヶ月も何年もアストラハンのラマ教徒カルムイクと、その偉大な僧侶とともに過ごしてきた。しかし、宗教用語について「異教的」といわれても、カルムイクはほかのチベット人ラマ教徒と同じで、またカルムイクが (ロシアに) やってきたときと同じ観念をもっていた。私は、シベリアに土地をもつ叔父とともに、ハラチン・ラマが住むというモンゴル国境に近いウラル山脈のセミパラチンスクを訪れ、また何回も辺境への旅をしたこともあり、まだ 15 歳前でしたがラマ教とチベット人についてよく知っていたわけで、(ライリー氏がいうように) 「中国語がチベットの言語である」などと考えたことはありません」(1884 年 *Light* 誌の編集者 Arthur Lilie への手紙, CW VI: 293-294)。

マダム・ブラヴァツキーとチベットとの邂逅は幼いころに始まっていた (井上, 高橋論文)。1837 年 5 月, 5 歳のおりに, 母方の祖父アンドレイが, ヴォルガ河下流のカスピ海に近いアストラハンのチベット仏教徒カルムイク人の保護監督長 (Trustee) に任ぜられて彼の地に赴いた。マダムは病弱だった文学者の母とともに, 一時期この祖父のもとに身を寄せ, 異教的雰囲気支配する地域で暮らした。ここで出会ったチベット仏教がマダムの仏教への目覚めであったことは, 著書『ヴェールを脱いだイシス』(『イシス』, 1877) にも述べられている。また, 自身の風貌がカルムイク風, あるいはモンゴル風, チベット風であったともしばしば言われている。このことはまた, マダムのスパイ疑惑をおおる効果もあった (Gomes 1987: 133-135)。

アストラハンには, 中央アジア系, トルコ系, アラブ系などが混在しており, 19 世紀前半まではインド人も住む地域であった。カルムイク (Kalmyk) はモンゴル系の人びとでロシアに移り住んでそのまま残ったオイラト (Oirat) の末裔の呼称であ

る (Bakaeva 2014, 井上論文)。カルムイクは、1943年ソ連によってその自治権を停止されたが、1957年に自治権を復活させ、現在もカルムイク自治共和国を構成しており、カルムイク人口は共和国人口のおよそ半数に当たる15万人ほどと推測される。カルムイクは異郷にあってもチベット仏教の伝統を保持してきたが (井上論文)、ソ連時代に寺院はほぼ壊滅状態になり、1988年までは仏教の痕跡はかき消されていた。しかし、ソ連崩壊後、とくに宗教の復活が著しく、寺院の再建などがさかんに行われているという (Bakaeva 2014)。

ガン一家はアストラハンの地で、カルムイクのチュメン公 (Prince Tyumen/Tumen/Tumene) と会ったとされる (Letters: 154)。作家であった母エレナ・ガンは、ゼネイダ・エル＝ヴァの筆名で小説を書き始めたところで、ここでの経験をもとに書かれた小説『ウトバーラ *Utballa*』 (Zeneida R-va, 1838) は、のちにフランス語にも訳された (Fuller 1988: 1-2; Cranston 1993: 14, 25; Meade 1980: 28-32; Neff 1937: 13, 高橋論文)。その後、エレナが母の没後祖父のもとにあずけられたときも、ふたたびカルムイクと交流し、チュメン公とも再会している⁵⁾。

1845年エレナ・ペトロヴァ14歳のときに、おそらく叔父のロスティスラフ (Rostislav Andreevich Fadeyev, 1824-1884) につれられてシベリアのモンゴル国境にちかいセミパラチンスクとウラル山脈に行った。ロスティスラフはシベリアに土地を持っていたようであるが、この旅行は父に連れられて行ったという説もある。そこは「ハラチン・ラマ (Harrachin Lama/Tarachan Lama)」が住むモンゴル人の国だったという。エレナは境界を超えてラマ教が信仰されているモンゴル側に馬で行くのを楽しみにしており、この地でチベット仏教やラマのことを聞く機会もあったともいう (Zirkoff 1966: xxxiii; Neff 1937: 13-14; CW VI: 293-294)。なお、ロスティスラフはのちに『コーカサス戦争の60年 *Shestdesyat let Kavkazskoj vojny*』 (1859) を出版し、古代イラン、イスラームの文化を紹介しているが、その書のエキゾチックな雰囲気はプーシキン、トルストイ、チェーホフ、チャイコフスキーなども注目していたようである (Cranston 1993: 33)。

エレナが親しく接したであろうカルムイクのチベット仏教の伝統は、チベット研究にも大きな役割を果たしていた。たとえば、アムステルダムの、敬虔派モラヴィア兄弟団の家族に生まれたイサーク・ヤーコブ・シュミット (Isaak Jakob Schmidt, 1779-1847) は、ナポレオン戦争のときにヴォルガ河流域のサレプタ (Salepta) にあるモラヴィア人居住地のもとに赴き、さらにそこで周囲のカルムイク人とも交流をもって、聖書をカルムイク語とモンゴル語に翻訳するなど、モラヴィア人のためだけ

でなく、カルムイクのためにも大きな貢献をなした (Walravens 2008: 163–164)。

またアメリカでは、カルムイク出身のゲシェ・ワンギェル (Geshe Wangyal, 1901–1983) が学問的にもまた現実的にも大きな存在となった。6歳でゲルク派の僧侶となり、ブリヤート・モンゴルのラマ僧ガクワン・ドルジェフ (Agvan Dorjjeff, 1854–1938) のもとで修行した。1922年にラサに赴き修行したが、ロシア革命後にボルシェヴィキによって仏教徒が弾圧されたことを知り、ロシアへは戻らずに北京、イギリスなどをへてインドにしばらく滞在した。1955年には、スターリンの弾圧によってオーストリアを経てアメリカのニュージャージー州に亡命したカルムイク人から請われてアメリカにやってきた。1959年の中国によるチベット併合後、とりわけアメリカで高まったチベットへの関心に促されて、多くのアメリカ人に影響を与えた (Lopez 2008: 191–192)。

マダム・ブラヴァツキーが1870年代半ばにすでにチベットの仏教について一定の知識を持ち、その一部とくにアストラハンのチベット仏教については、主著『イシス』で触れている (杉本論文)。このことは、当時ほとんどチベットに関する知識を持たなかったアメリカ社会に大きな影響を及ぼし、断片的にすぎなかったチベットへの知識を普及させた功も実際あった (Lopez 1998)。さらに、アメリカのチベット熱をロシア領のラマ僧などが担ったところに伝統の伝播における東西のすれ違いのもう一つの例として、注目すべき意義がある (杉本 2010; 2012)。

4 本特集の意義

本特集は、現在もその影響力を保持し続けているマダム・ブラヴァツキーにとっての「チベット」のもつ意義について、ロシアからの視点を重視しながら考察しようとするものである。言葉の問題もあって、ロシア人マダム・ブラヴァツキーのロシア時代あるいはロシア政府との関係などについてはあまり検討されてこなかった。本特集においては、はじめに、井上岳彦論文において、マダム・ブラヴァツキーが幼少の頃に接したロシア領内のチベット仏教徒カルムイクについて、とくにそのオリエンタリズムの対象としての意義について詳細に検討し、つぎに、高橋沙奈美論文において、早世した母の小説『ウトバーラ』の概要と、カルムイクの住むアストラカンを含む「コーカサス」のロシア領内における周縁的な地域としての意義について考察する。高本康子論文では19世紀後半に鎖国状態にあって人跡未踏の「チベット」がもつオリエンタリスト的表象としての意義について議論したのち、杉本良男論文で、マダ

ム・ブラヴァツキーにとっての「チベット」の意義を、当時のグレートゲームのなかでの国際関係やインド国内のナショナリズムなどの複雑な状況を合わせて再考する⁶⁾。

冒頭にも述べたように、今世紀に入ってから神智主義、神智協会研究は大きな進展を遂げているが、マダム「チベット」に関してはいまだにそれを信ずるか信じないかの神学的議論に終始しているきらいがある。またウイスワナーダンのグレートゲームとの関わりにおけるチベット表象の評価に関しても、その後大きな進展は見られない。本特集はこれを、ロシア側の資料によって幼少のころのマダムを取り巻く環境を考慮しながら、オリエンタリズムとの関連において再評価しようとするものであり（井上、高橋論文）、また欧米、日本などにおけるチベット・イメージにおけるその不在性、不可視性の積極的意味づけ（高本論文）、およびインド的文脈におけるナショナリズムとの関連について再検討しようとするものである（杉本論文）。

本特集はその全体を通じて、マダム・ブラヴァツキーの幼児期の周縁性を伴う1830年代の実体験が（井上、高橋論文）、19世紀半ばのオリエンタリスト的チベット表象と（高本論文）相互に触媒し合い、さらに19世紀後半の反近代主義的な宗教的、政治的な状況（杉本論文）の中で、チベット・イデオロギーとして結実し、一方で現代隠秘主義（オカルティズム）の祖とあがめられ、他方で南アジア・ナショナリズムへと大きな影響を残した歴史過程についての、杉本のいう系譜学的研究に棹さず歴史的視点を含む人類学的研究に包含されるものである（杉本2015）⁷⁾。

なお、本特集ではロシア語、インドの諸語、チベット語などの人名が頻出するが、これらの言語による人名のローマ字表記や日本語表記には絶望的な混乱がある。小特集では、ロシア語については高橋、井上、インドの諸語については杉本、チベット語については高本がそれぞれの専門的な立場から原則を定めた。しかし、表記法についてはそれぞれの従来論考などとの統一性もあるので、統一的な表記を初出の箇所では括弧内に併記している場合がある。表題のマダム・ブラヴァツキーについては、世界的に知られた表記を使うが、ロシア研究者がエレナ・ブラヴァツキーと記すのは忍びない事情もあり、ブラヴァツカヤとしている例もある。本誌が「翻訳」についてもっとも敏感であるべき人類学のジャーナルであるという事情を十分ご理解いただけるものと考えている。

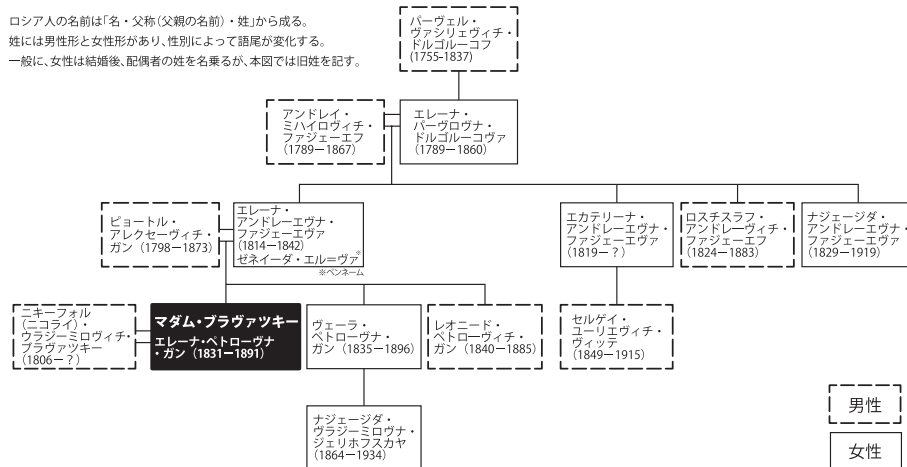
注

- 1) 著者のコナン・ドイルはロンドンの心霊研究会 (SPR) の会員であり、また神智協会会員だったという説もある。
- 2) デリダ『マルクスの亡霊たち』の増田和夫氏の訳による。
- 3) ちなみに、ラックマンはもとロック・グループ「ブロンディ」のベース・ギター奏者ゲイリー・ヴァレンタインとして活躍していた。ブロンディの神秘主義的な曲の作詞者でもあり、代表曲「今が最高」(I'm Always Touched) By Your Presence Dear, 1977) には、“We could entertain each one with our theosophies” というくだりもある。その後グループを離れて UCLA など学び、現在も神秘主義、隠秘主義 (オカルティズム) 関連のライター、ジャーナリストとして活躍している。
- 4) なお、マダムの名前について、拙稿でエレナ・ペトロヴナ・フォン・ガンとしたが (杉本 2012)、ロシア読みではフォンを省略するのが通例である。記して修正する。逆に、ロシア語読みを徹底すると、かえって混乱を招くので、いわば通称としていささかの皮肉も込めて「マダム」と呼ぶ。また、姓もロシア語的なブラヴァツカヤではなく、通称のブラヴァツキーとする。
- 5) なお、母の母エレナ・パーヴロヴナと交流のあったとされる地理学者グザヴィエ・オメール・ド・エル (Xavier Hommaire de Hell, 1812–1848) の『カスピ海, クリミヤ, ロシア南部のステップ地域 Les steppes de la Mer Caspienne, la Crimée et la Russie meridionale, etc., 1843–1845』では、ド・エルがカルムイクのテュメン公に会ったことが述べられている (Zirkoff 1966: xxviii)。
- 6) 本特集は、2014年7月26日に行われた第9回「仏教と近代」研究会 (龍谷大学龍谷大学大宮学舎) における報告をもとにして、いずれも新たに書き起こされたものである。報告の機会を与えていただいた吉永進一氏および当日有意義なコメントをいただいた赤井敏夫氏はじめ関係諸氏に篤くお礼を申し上げます。ちなみに当日のプログラムは以下の通り。
趣旨説明：杉本良男 (国立民族学博物館)
井上岳彦 (北大スラブ研) 「仏教の道はカルムイク草原に始まる」
高橋沙奈美 (北大スラブ研) 「小説『ウトバーラ』から読む、ロシアからカルムイクへのまなざし」
杉本良男 (国立民族学博物館) 「幻想の聖地チベット」
コメント：高本康子 (北大スラブ研)、赤井敏夫 (神戸学院大)
総括：吉永進一 (舞鶴高専)
- 7) 本序論で引用した文献は、杉本論文と重複しているものがほとんどなので、一括して特集末尾に掲載する。



マダム・ブラヴァツキー関連地図

ロシア人の名前は「名・父称(父親の名前)・姓」から成る。
 姓には男性形と女性形があり、性別によって語尾が変化する。
 一般に、女性は結婚後、配偶者の姓を名乗るが、本図では旧姓を記す。



マダム・ブラヴァツキー系譜図